

## ■事業報告

### 1. 2025 年度活動概要

理事長：村田 智明

2012年に公益社団法人に移行して以来、当協会はもはやデザイナー単独の組織にとどまるのではなく、デザイナーを取り巻く多様な関係者と協働し、デザイン産業全体の振興を牽引する、より大きく包括的なプラットフォームを構築するために活動している。この課題に対し当年度は、当初の計画で目標とした業界横連携、周辺領域を繋ぐ役割の推進を果たすため、他のデザイン団体やアワード主催機関、スタートアップ支援組織、学生支援団体をはじめ、企業、行政、自治体などとの広範な連携を強化し、積極的な情報発信と共創の機会創出に努めてきた。

その代表的な成果として、以下3つの事業が当年度から新たに始まった。

#### 1) JIDA SUMMIT

「インダストリアルデザイン起点の新産業イノベーション」と称し、スタートアップ領域との連携によるイノベティブな課題解決を目指すビジョンと行動力をテーマにした大きなイベントとした。

9月フォースタートアップス株式会社にて実施。(詳細はセミナー事業報告)

#### 2) 技能五輪国際大会への協力

隔年開催で48回目となる技能五輪国際大会2026上海に向けた選手選考と強化・大会出場までを、厚労省・中央職業能力開発協会(JAVADA)から受託した。これは、24年大会から採用された「工業デザイン技術」という新職種に、日本から初めての代表選手派遣のために、この分野でのパートナーとしてJIDAが選ばれたものである。26年2月には代表選手を選定し、現在は9月の上海国際大会に向けて強化訓練の最中である。28年の愛知開催に向けての準備も進めている。(詳細は交流事業報告)

#### 3) Red Dot への協力

ドイツの世界的デザインアワードとして著名なRed Dotとの協力関係が、当年度からスタートした。当アワードの日本国内への普及啓発と、応募や申請の相談窓口としての協力体制を整えると同時に、JIDAデザインミュージアムセレクションとの連携協力も考え、お互いの発展に相互協力する協定を結んだ。(詳細は交流事業報告)

その他、恒例となっている事業としては、ミュージアムセレクションVol.27、国際ワークショップISDW2025の韓国開催、エコデザインワークショップ、賀詞交歓会、海外から講師を迎えて行なうモビリティデザインのセミナーとワークショップ、インハウス女性デザイナー研究会のワークショップ、素材加工勉強会、子供ワークショップ、大学生向けのデザインコンペ、卒業制作展訪問と優秀作品表彰、医療系やAI系、知財系のセミナー等々、例年通りに実施できた。他にも鉄道デザインセミナー等の各種セミナーや展示会出展等々、多種多様な事業が企画・実施された活力ある年となった。

当年度のこうした多角的な活動を通じて、JIDAはデザインの未来を拓く「開かれた受け皿」としての機能を着実に高めている。

### (1) 資格付与事業 < 国民から信頼される職能の確立 >

インダストリアルデザイン関連の人材育成を目的に、知識水準の標準化を図り、その知識レベルを第三者からも評価される仕組みとして、検定試験を実施し資格を付与する事業を2010年より行なっている。本事業は、検定事業と関連出版事業との相乗効果を基本として運営している。

当年度は「ものづくりに関わるすべての人のためのデザイン検定」をテーマに、より多くの人にJIDAデザイン検定を認知してもらうため広報活動の強化に注力した。具体的には、Webサイトおよびリーフレットを、より内容が伝わりやすいものへ刷新した。さらに、9月のJIDA SUMMITおよび10月の

Designship イベントにおいて担当理事が登壇し、これまで JIDA デザイン検定を知らなかった層に向けて周知・訴求を行なった。また、全国のデザイン系および工業系の高校 50 校に対して JIDA デザイン検定の資料を発送し、これまで十分にアプローチできていなかった、ものづくりに関わる若年層への認知拡大を図った。

出版事業では、1 級用テキスト『プロダクトデザイン（改訂版）』が重版、2 級用テキスト『プロダクトデザインの基礎（改訂版）』は増刷が決まり、それぞれ年度内に実施された。

### 1) デザイン検定事業

当年度の受験者数は 206 名（1 級 93 名、2 級 113 名）となり、前年度比で 33 名減に終わった。PR 活動として新規にポスターを作成し、パンフレットと共に、全国からピックアップした高校に配布した。

### 2) 関連出版事業

1 級用テキストである JIDA 編さん『プロダクトデザイン（改訂版）』の重版第 5 刷にあたり、検定名称の変更と、10 か所程度の軽微な修正を反映した。2 級用テキストである JIDA 編さん『プロダクトデザインの基礎（改訂版）』も 9 月に増刷（1,500 部）を行なった。

## （2）セミナー他事業 < 専門的知見の充実による社会貢献の推進 >

専門的知見の充実による社会貢献を推進する目的の本事業は、インダストリアルデザインの普及啓発と人材育成のために重要な事業と位置づけ、当年度は通常以上に活発な活動を行なった。当年度で通算 107 回となった素材加工勉強会や、定例となっているインハウスセミナーなどは予定通り実施した他、各委員会やブロックが企画・運営するセミナーを各地で実施し、全体では 19 本、参加人数は 800 名近くに上った。（事業一覧表参照）

### 1) 素材加工勉強会

当年度は、第 106 回、第 107 回勉強会を 6 月と 10 月で開催した。第 106 回では、オンライン形式でシート成形の勉強会を行った。第 107 回では、「見えない廃棄」を「美しく見える化」と題し、アップサイクルの現場に触れるため実際の工場に足を運び参加者から好評を得た。2 回の勉強会参加者は延べ 23 名。

### 2) インハウスデザイナー向けセミナー

「JIDA インハウス女性デザイナー研究会第 38 期研究活動」を継続実施し、参加者に主体的な学びの機会を提供した。「企業グミ研究活動記」をテーマとして、各社の企業特性や価値観を「グミ」という題材に置き換えて可視化する研究活動を展開し、企業理解と表現研究、会員企業相互の交流促進につながる内容となった。

### 3) デザインスクール

公開サイトの準備はほぼ終え、コンテンツ制作は具体的に進んだが公開可能な数までには届かず、計画していた当年度中の公開はできなかった。

### 4) 特別セミナー

その他多数のセミナーの中でも、当年度は定例にはない特別なセミナーを 3 本開催した。一つは理事長主導で開催した JIDA SUMMIT（冒頭文中）。2 本目は日本の鉄道デザインの第一人者と言われた故木村一男氏の逝去に伴う記念セミナー。3 本目はデザインミュージアムセレクション Vol.27 のゴールド受賞企業によるトークセッションで、いずれも参加者多数のセミナーとなった。（セミナー委員会参照）

## （3）体験活動事業 < 次世代人材の育成による国家基盤の充実 >

デザイン系の学生・社会人・小学生など幅広い層を対象に、プロのデザイナーが指導や協働を行う

体験型プログラムを実施した。これらの活動は、人材育成および世代・領域を越えた交流の促進に寄与している。なお、以下の事業に加え、企業訪問や工場見学会なども各地で実施した。全体では9本、参加者は200名を超えた。(事業一覧表参照)

### 1) 国際デザインワークショップ (ISDW)

学生の国際的視野を広げるために、韓国インダストリアルデザイン協会 (KIDA)、台湾工業デザイン協会 (TIDA) と共同で国際学生デザインワークショップを毎年開催している。当年度は、3カ国から計57名の学生と6名のチューターが集い、ソウル・成水洞 (ソンス) で開催された。会場は Hanyang 大学を拠点とし、8月17日から22日までの6日間にわたり、「Local Creator」をテーマに、全10チームに分かれて極めて濃密なプログラムが展開された。後日報告書が届き、当年度の本事業は無事完了した。

### 2) Next EcoDesign ワークショップ

8月に The Gallery Too にて、正会員のプロデザイナーが学生を指導するワークショップを行ない、エコデザインに取り組んだ。成果は東京ビッグサイト「エコプロ2025」にて展示され、学生とプロの協働による実践的な学びの場となった。参加者はプロと学生合計で37名。

### 3) 子どもワークショップ

小学生の親子を対象とした恒例の子どもワークショップは、8月に東京ミッドタウンにて2回行なった。1回目は木材の端材とねじを使ったワークショップ。2回目は8年目となる電車ワークショップを行ない、親子合わせて2回合計36名の参加があった。

### 4) 卒業制作展見学

中部ブロックと北陸ブロックでは、地元のプロデザイナーがデザイン系の大学、専門学校の卒業制作展を訪問し、プロの目線で評価・表彰する事業を当年度も行なった。

### 5) 学生デザインコンペ

関西ブロックでは「第11回 JIDA 関西ブロック学生デザイン賞」を開催した。当年度は、毎日使い続けたくなる新たな道具の提案「NEXT STANDARD」をテーマに行ない、66点の応募作品が集まった。

### 6) 見学会など

中部ブロックでは「JIDA Student Selection2025」と称し、就活に挑む学生と企業との接点をつくる新たな取り組みを行なった。選抜された学生のプレゼンテーションを企業担当者が観て評価、アドバイスをするなど、26名が参加した。他にも福島原発や笠間市の見学、企業の訪問なども行なわれた。

## (4) ミュージアム事業 <<デザインを通じた日本文化の高度化>>

ミュージアム事業には主に2つの取り組みがある。ひとつは、デザインの優れた製品を顕彰するための審査・選定を行う事業。推薦品を公募し、当協会審査会が応募商品を選定する。更にその内容を公表するために展覧会の開催、図録の制作・配布を行なうセレクション事業。もうひとつは、選定品を収蔵・管理しながら、インダストリアルデザインの世界を発信するための展示・公開を行う事業である。JIDA デザインギャラリーのショーウィンドウでの常設展示に加え、外部展覧会への協力、および、公式サイト「JIDA デザインミュージアム」の運営を継続的に行なうミュージアム事業である。27年目となった当年度もすべての事業を予定通り滞りなく実施できた。日本の製品開発の進展とともに歴史を重ねており、産業振興、文化振興の観点から今後も継続することが期待されている。

### 1) セレクション事業：デザインミュージアムセレクション Vol.27

デザインミュージアムセレクション Vol.27 を実施した。過去最高の354点の推薦品の中から当協会審査会による審査・選定、および、外部の特別審査委員によるゴールドセレクションの審査・選定を行い、その数は合計59点(ゴールドセレクション5点含む)となった。例年通り、AXIS ギャラリー

での展覧会、選定証授与式、および、図録の発行を実施した。図録は 2,300 部を発行し、国内外の関係団体、教育機関、図書館、美術館等に無料配布した。

## 2) ミュージアム事業：展示と収蔵

セレクションで選定された製品の中から寄贈を受けたものをストックヤードに収蔵、管理、展示した。当年度の Vol.27 では 13 点の寄贈を受けた。これを活用し、JIDA デザインギャラリーに併設されているショーウィンドウ（JIDA デザインミュージアム in AXIS）で選定品の常設展示を実施した。また、ウェブサイト「JIDA デザインミュージアム」にて Vol.27 を収録、公開し、セレクションのアーカイブとして一層の充実を行なった。当年度は巡回展を実施できなかった。

## 3) 医療機器の展示会

3 年目となる当年度も実施すべく検討を重ねたが、出展希望者が揃わず、当年度は出展を断念した。

## 4) その他主な展示会など

Next Eco Design 展 2025 は例年通り継続、プロと学生が 37 名参加。4 月に開催されたプレミアムインセンティブショー2025 は継続して参加でき、4 社が出展した。パッケージデザインパビリオンは隔年開催にて当年度は開催されなかった。他にも新たな展示イベントを 2 本開催した。(事業一覧表参照)

## (5) 調査・研究及びその普及事業 << 専門性の深化及び客観化 >>

調査・研究事業には、民間では提供できないデザインツールを使い易い形に開発し普及させる事業と、社会課題を解決する目的で調査・研究を行う事業と、知的財産に関する調査・研究事業などがある。更に、デザイナーや関連産業に関わる人たちに役立つ専門情報を提供する事業なども行なう。

当年度は特に、社会課題解決を目的とする研究事業で、他団体との共同研究会の中から発生した、産総研、東京科学大学などからの受託研究を多数実施することができた。(事業一覧表参照)

### 1) 傷害予防のためのデータ活用に関する共同研究

「傷害予防のためのデータ活用に関する検討委員会」として、最近の事故の事例や分析の報告をもとに事故予防に関する共同研究会を、当年度も例年通り隔月で 6 回実施した。

#### ① シルバーカー事故リスク低減のための受託研究（経産省⇒産総研⇒JIDA）

高齢者が買い物や散歩に活用するシルバーカーは、段差等に躓くなどによる転倒事故が多い。そのリスクを低減する取り組みとして、特定メーカーとの製品改良提案を目的としたワークショップを行なった。その結果生まれた 2 点の提案を実証実験するためのワークモデルの設計と試作を実施した。委員会メンバー 3 名が取り組んだ。更に、東京科学大学がシルバーカーの各種製品や試作品を実験検証するための模擬道路環境の制作も行なった。

#### ② 新巧技台デザイン開発事業（オオニシ体育⇒JIDA）

24 年度から継続している本プロジェクトは、25 年度から PHASE-3 に入り、基本パーツの実施デザインから試作設計を行なった。26 年度まで継続し社会実装を目指す。

#### ③ 高齢者身体保持の研究事業（東京科学大学⇒JIDA）

24 年度から委員会の中に独自研究グループを 3 組作り、その中の高齢者グループがテーブルに後付けできる身体保持機能の研究を行なった。その成果として 8 点の提案が採用され、試作用のデータ作成までを東京科学大学の支援で行なった。

#### ④ 高齢者ハンドブックの追加修正事業（産総研⇒JIDA）

2019 年度に制作したハンドブックに計測データの追加があり、当年度にデータページを 9 ページ追加することになった。その追加ページの制作を受託し、メンバーが実施した。

## 2) デザインツールの開発と頒布

当年度の頒布実績は全 46 冊と昨年度とほぼ同数の販売冊数にとどまった。サンプルズ「1」をプラス

チック台紙から紙製台紙へリニューアルする計画は予定通り実施し、200冊分の印刷台紙が納品された。新台紙での組み立ても2回実施し、新バージョンでの出荷をスタートさせた。KIDS DESIGN TOOLSの頒布も5セットではあったが継続して行なった。

### 3) 知的財産権に関する研究 / 医・工・デザイン連携研究

日本弁理士会意匠部会と連携した共同研究会、DOO（デザイン団体協議会）保護研究会との共同研究、タイムスタンプの共同契約、弁理士による知財相談会などを行った。また医・工・デザイン連携部会でも研究会やトークイベントなども行われた。JPAA（弁理士会）意匠委員会との合同研究会によって生まれたNDA雛形整備事業は、策定されたNDA雛形の契約書タイプとデザインタイプの2タイプを当年度に公開できた。

## （6）交流事業 ≪社会貢献及びデザイン価値の拡充発展≫

内外の関係団体との交流を通して、インダストリアルデザインが社会ひいては人間生活そのものに役立つという共通のテーマを、より一層深化させていく活動を行なっている。当年度は、世界的に著名なデザインアワードであるRed Dotとの連携協定を締結し、当年度後期から本事業をスタートさせた。一方日本では、技能五輪と呼ばれる「WorldSkills Competition」の世界大会2026上海に向けた日本代表選手の選考と、選手の強化訓練、9月の本大会への出場までを支援する団体として厚生労働省から選ばれ、一連の運営事業を受託した。どちらも単年度事業ではなく継続事業となるため、急遽新たな専用部会を立ち上げるなど、組織づくりからスタートするというハードな1年となった。

それ以外の、WDO、DOO、ADA、インハウスなどの定例継続事業は、いずれも滞りなく計画通りの事業を行なうことができた。賀詞交歓会やデザイナー同士の交流会なども行なった。（事業一覧表参照）

### 1) 国内関係機関との交流や協力事業

#### ①技能五輪国際大会への協力（厚労省⇒JAVADA⇒JIDA）

技能五輪国際大会は、2024年のリヨン大会から「工業デザイン技術(Industrial Design Technology)」という職種が新たに採用され、第48回大会である2026上海では2回目の競技開催となる。日本はリヨン大会には選手を派遣できなかったが、2028年には日本開催（愛知大会）が決まっており、そこでは全職種に代表選手を出場させる必要があることから、このIDT職種への選手派遣のために厚労省からJIDAへの要請があったものである。JIDA渉外委員会技能五輪部会は、10月から選手募集を開始し、12月には2次選考までを行なって1名の日本代表選手を選考した。現在は、26年9月の本大会に向けて選手の強化訓練を継続している。

#### ②他団体、企業、学生等との交流事業

日本デザイン団体協議会（DOO）との交流事業では、「第2回JAPAN DESIGN SUMMIT」を11月に開催した。DOOが行なう研究活動、JDM（Japan Design Museum）設立に向けた活動や、知財の研究活動などにもJIDAからメンバーが参加し、当年度も同様に活動を行なった。

企業の女性デザイナーに呼び掛けてグループをつくり、毎年違うテーマでワークショップを行なう「インハウス女性デザイナー研究会」の活動も、例年通り発表まで滞りなく実施できた。東京都が行なう中小企業にデザインを導入するTASK事業にも例年通り協力し、4社に対して8人のデザイナーが対応した。デザイン系大学の卒業制作展訪問や、学生デザインコンペ、JIDAが行なうイベントに学生を招待するなど、学生との交流も多種実施し、今後も広がりつつある。

### 2) 海外関係機関との交流や協力事業

#### ①Red Dot Design Award（Red Dot GmbH⇒JIDA）

9月にRed Dot GmbHとの間でLoU（Letter of Understanding）を締結し、日本における広報、応募支援、プロモーション業務を開始した。JIDA公式サイト内にRed Dotページを開設し、応募や問い

合わせへの対応をスタートさせた。また、日本国内の受賞者コミュニティ形成に向けた「Red Dot Dinner Tokyo」を開催し、日本を代表する企業やプレスを集め、広報と交流を広げた。

## ②その他海外団体との交流

韓国、台湾、日本の各デザイン協会との交流と協力を行なうアセンブリADAは、当年度も8月に代表者会議と恒例の3か国学生ワークショップを韓国で開催した。

WDOは、JIDAの太刀川理事がWDO理事として今年も参加し、年間5回のWDO Board Meetingと1回のPre-Board meeting sessionに出席した。中日工業設計中心（CJIDC）をはじめとする中国団体との交流は、時世の関係から25年度はほとんど動きが無く、計画は実施できなかった。

## （7）共益事業 ≪会員扶助及び会員支援≫

### 1）DP ホットライン

フリーランスデザイナーを対象に知財の相談窓口「DP ホットライン」を開設し、特許や意匠登録などに関する相談や、外部との知財に関するトラブル等について専門家に気軽に相談できる機会を設けている。当年度も開設し、相談に答えた。

### 2）会報誌

「ANNUAL REPORT」と称し、1年間の事業活動をまとめたカラー冊子を編集・印刷し、全会員と関係団体に無償配布している。当年度も40ページの冊子を800部印刷し配布、更には公式サイトにて全ページを開示した。

### 3）広報活動

「Portfolio」と称し、会員の紹介ページを公式サイト内に開設した。主にデザイン受託業務を行なう会員が自身の作品や仕事のPRをすることで、デザイナーを探すメーカーとのマッチングを推進することを目的とし、正会員に無償提供を始めた。ダイヤモンドオンラインへの記事発行は、当年度も2件実施した。Workplaceに代わるコミュニケーションツールは、Slackを採用し、委員会を中心とした事業活動での活用を使用した。更に当年度は、Red Dotと技能五輪という二つの新たな事業が始まったため、公式サイト内に新たなページを開設した。イベントカレンダーをトップページに設置し、誰もがイベント日程を常に見られる環境を整備した。

### 4）その他

会員の創作活動を保護する目的で、「タイムスタンプ」と称するデジタル証明機能を採用することになった。当年度は有志11名による試験運用からスタートし、26年からは会員に安価で活用してもらえるよう本格運用を開始する予定。

## （8）運営体制の充実をはかるための取組

当年度は、運営体制の充実及び透明性の向上を図るため、役員構成に外部理事2名と外部監事1名の登用を行なった。人選は、前年度に改定した役員選挙規則、選挙管理委員会運営の手引きに従って特別選挙にて候補者を選定し、定時総会での承認も得られ総会后から正式に就任した。これにより、理事は合計13名、監事は3名体制となった。外部監事は税理士の資格を有する専門家である上仲孝明氏が就任し、協会のガバナンス強化を計る取り組みの一つとなった。